

最初に漕ぎだす力

ある夕方、幼児の部屋にお邪魔したら  
年少の女の子2人が長椅子に並んで  
色鉛筆で紙になにか描いています。  
無造作に筆を走らせたようにも見えましたが  
中央部分になんとか形のようなものがあったので  
「これ、カメさんの頭？」と聞くと  
「カメさん？ ん〜ん、モグラ！」との答え  
きっと絵本などにモグラが登場したのでしょう  
向うのテーブルでは年中の男の子がマンダラに塗り絵。  
何枚も何枚も夢中で描いていて、描くたびに  
色のバランスや配置、グラデーションなどに  
個性が見てとれるようになっていました。  
その横で年少の男の子はマンダラを貼る台紙を何十枚もつなげ  
アコーディオンのように伸び縮みさせては満足そうな顔。  
先程の年中さんが近づいて来て互いの  
「マンダラ・アコーディオン」を見せ合う場面も

つくしの子どもたちの何気ない日常風景を見ていて  
おもしろそう、やってみたい、に向かって  
「最初に漕ぎだす力」の大切さを改めて感じました。  
この力だけは、大人は与えることができません。  
「これ、おもしろそう！」。自分の心が動いたものに  
その時、その場で、とことん取り組むことができる。  
それがとことん保証されている。だから  
子どもは安心して自分を表すことができる。そして  
自分と違う興味をもつ友だちとハーモニーを奏でることさえできるのです。  
(つくし保育園園長 つだかすお)

<この本もおもしろい>

発達を研究している池谷裕二さんによれば、「知識を詰め込む早期教育よりも自然の中で様々な経験を重ね、その経験を説明したり書いたりするほうが独創性や適応力の高い人間が育つと思う。私たちはもう一度、育児や教育の原点に戻り、生物としての人間とは何か考える必要があります。また育児に対する周囲の理解が進むだけで世の中が変わる。教育とは結局子どもが自力で生きていける思考力の発達をサポートすることですから」  
(『パパは脳研究者』、クレヨンハウス)